

「初心者も男性教諭も指導できるダンス授業」

東海大学体育学部 中村なおみ

I. 今求められる「主体的に考えさせる授業」 アクティブ・ラーニング

「習得から探求へという『基礎から積み上げる学習』と、探求から習得へという『基礎に降りていく学習』があつていい。…「教えて考えさせる授業」が習得サイクルでは基本である。「教える」が習得で「考えさせる」が探求と言うのは誤解である。習得の中にこそ、**教える部分と考えさせる部分**を設ける必要がある。」

市川伸一氏（日本教育新聞 2008.5）

◆体育の学習指導で考えると・・・

・これまでの「習得型の学習」

「こう動く！」完成された文化の型（スキル）＝答えを先に教え、そこに体を合わせていく

・これからの時代に期待される「探求型の学習」

「どう動く？」どうしたら自分にそのことができるようになるか考えながら工夫⇒原理原則を学んでいく

「探究型の学習」では学びを深めていく「問い」が重要となる。

問いを投げかけ、考えさせつつ、深い理解や習得へと向かわせる優れた保健体育授業の例

例1) 柔道 宮本乙女先生の例「どうやったら相手を抑え込めるか？」

例2) サッカー 中塚義実先生の例「ルールはなんであるの？」

例3) 保健 岡崎勝弘先生の例「富士山が見える日数はどう変わったか？」

これらの授業では、「問いかける」指導技術、「問いかけマインド」が学習を支えている。

問わずに命じる授業では、生徒は考えない。問われるから、身体が考えたり、感じたり、工夫しようとする。

⇒主体的な取り組み、児童・生徒が相互に問いかけあう、学び合う場を創り出す

子どもの反応や動きを想定して、視点を多様に広げたり、深めたりする良質な問いができることが重要。

◆表現運動・ダンス領域の学習指導では、

昭和22年に導入後、ずっと実践的に研究されてきました。

先生が
言葉や・動きで
問いかける児童・生徒が
動きで
答える

動きを探究することが領域の特性であるため、

「どう動きたい？」を問いかけ

児童・生徒の自己表現を引き出していく

全国ダンス・表現運動授業研究会では、「課題解決型のダンスの授業」の具体的な授業の内容と方法について現場での授業実践と研究を重ねてきた。

(1時間の中で「踊る」「創る」「観る」という3つの経験を循環漸進的に重ねていく)

この研究成果は、「明日からトライ！ダンスの授業」（2011）中学校版、

「みんなでトライ！ダンスの授業」（2014）小学校版にまとめられている。

第49回 全国女子体育研究大会 「粹に 雅に 明日を拓く ～問いかけから広がる可能性」

(幼児) わくわくはさむ問いかけ～みんなで楽しく

(小学校) 心揺さぶる問いかけ～ていねいに耕す

(中学校) 仲間とつながる問いかけ～グループワークを生かして

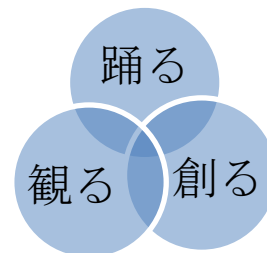
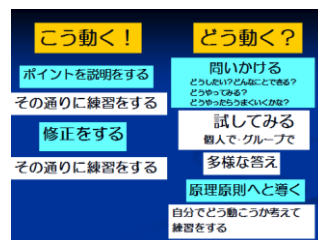
(高等学校) 深める・高める問いかけ～イメージが多様な空間へ

(特別支援) 一人一人の良さを生かす問いかけ～軽度知的障害・発達障害の生徒と

(大学) 探る・伝える問いかけ～観る力・踊る力・引き出す力

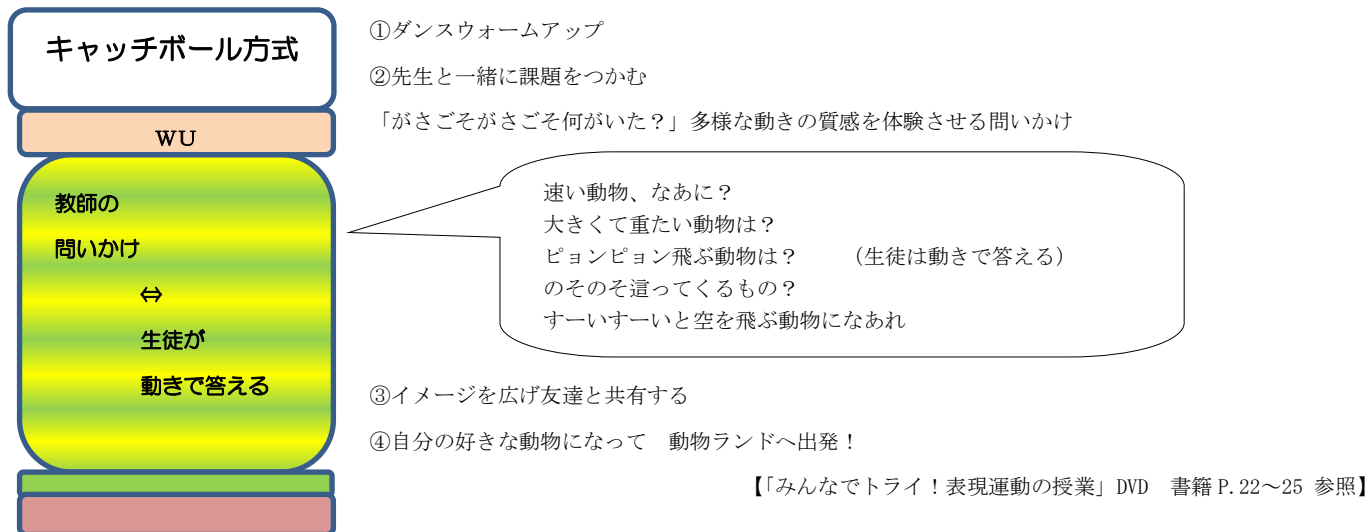
(生涯スポーツ) 自分への問いかけ～踊って輝く

(2015年度)

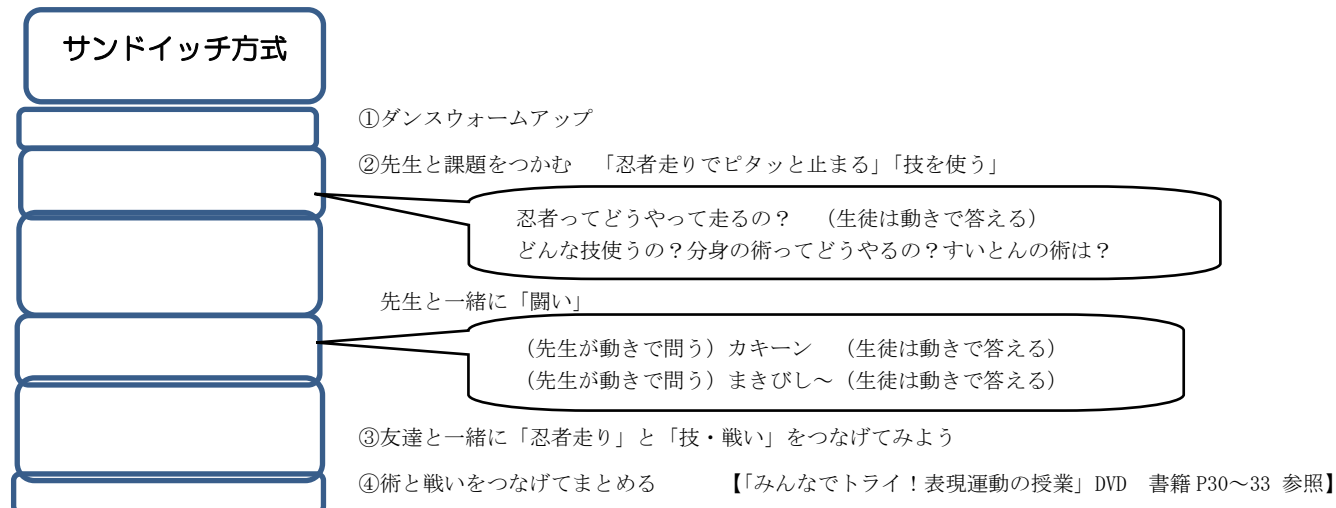


Ⅱ.「問いかけて引き出す」学習指導 発達段階に応じた問いかけ （研修は小学校を中心に）

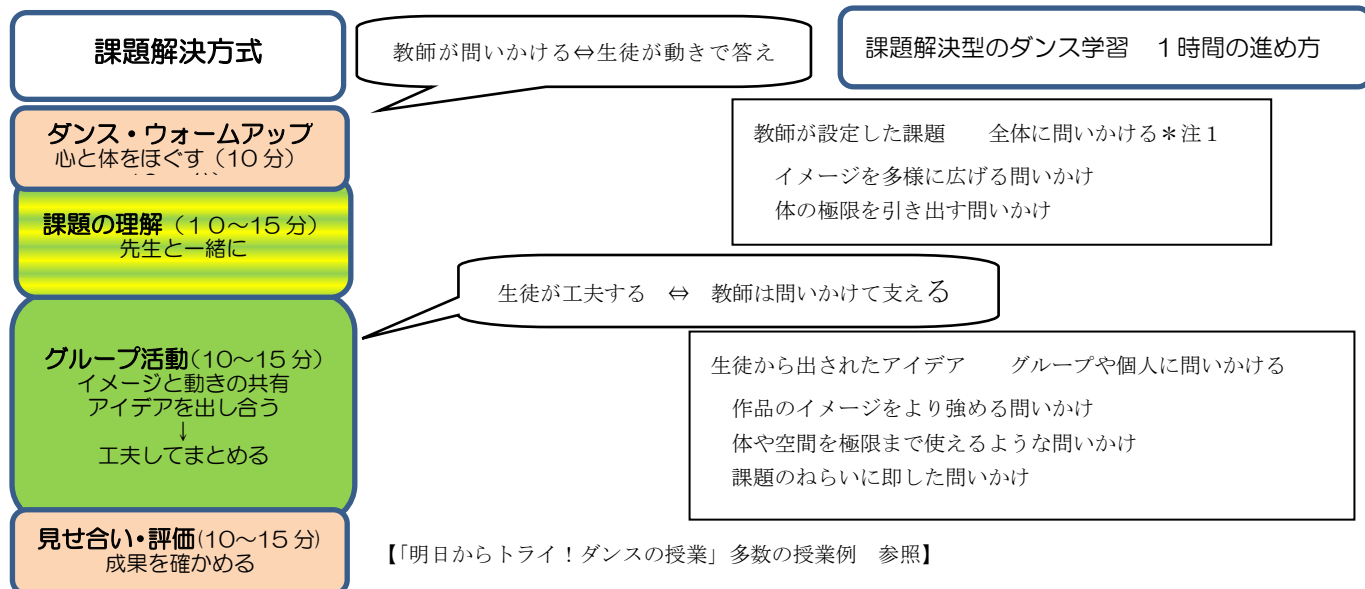
小幼児・小学校（低学年） 「楽しい動物ランド」



小学校（中学年） 「忍者参上！」



小学校（高学年）・中学校・高等学校・特別支援・大学



中学校3年生、高校、大学では、より難しい舞踊課題に挑戦し、内的・抽象的な表現へと向かう。
動きの質の違いを体でつかむ問いかけ。表現を深めるための問いかけが必要。➡自分への問いを持つ。